

第9回「文芸思潮」エッセイ賞 発表

第9回
文芸思潮
エッセイ賞

二〇一三年度第9回「文芸思潮」エッセイ賞に多数の御応募をいただき、まことにありがとうございました。今回も五二一篇の作品が寄せられ、十代から八十歳代まで幅広い世代から寄せられたばかりでなく、アジアやヨーロッパ、南北アメリカと世界中から広く御応募をいただきました。また過去の重要な記録や、社会に対する鋭い批評、科学の最先端の記録も多く寄せられ、実にたくさんのお優れた作品が集まった、ますます充実したコンテストとなりました。

例年の通りまず選考委員会予選担当による第一次・二次選考、続いて第三次選考が行なわれ、最後に三神弘、水木亮、福岡哲司、都築隆広、五十嵐勉五人の選考委員によって討議されました。厳正な審査の結果、以下の通り受賞作が決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。今号には当選作および優秀賞を発表させていただきますが、以後奨励賞、佳作、入選作も、極力「文芸思潮」誌上に掲載させていただきます。御期待ください。

明年いよいよ10回となるこのエッセイ賞は明年もほぼ同じ要領で募集いたします。どうぞ奮って御応募ください。なお授賞式は明年一月二十五日(土) 大田区民プラザで行なわれる予定です。どうぞ御出席ください。

「文芸思潮」エッセイ賞

最優秀賞

「私の『チゴイネルワイゼン』」
鈴木綾子 (徳島県小松島市)
「『今』を生きる」
島生樹郎 (福島県郡山市)

優秀賞

「救急車は呼ばないで」
山田まさ子 (東京都国立市)
「虐待」
松川琴美 (兵庫県尼崎市)
「チャッピー」岡野みつる (富山県高岡市)
「きつと、帰ってくつと」
西島雅博 (福島県いわき市)

「あの夜、僕たちは成し遂げた。」

サトウユウ (神奈川県茅ヶ崎市)

「心を守るために」

浅井真理子 (東京都文京区)

「空白の通知表」

城戸則人 (広島県呉市)

「永久の別れ」沼 俊

(埼玉県上尾市)

奨励賞

「ももこの世界」

栗山恵久子 (東京都府中市)

「砂の墓穴」

外山寛子 (神奈川県横浜市)

「紫蘇染めの晒木綿」

寒川靖子 (香川県丸亀市)

「譚妄」

白楊風子 (兵庫県神戸市)

「杖、光る」

印南房吉 (神奈川県横浜市)

「李の花」

武藤蓑子 (東京都多摩市)

「インド移住まで——天の配剤——」

李耶シヤンカール (インド・プリー市)

「白い傷跡」

宇佐美宏子 (愛知県名古屋市中)

「バードテーブルの砂」

高橋惟文 (山形県山形市)

「改心」

上杉 辰 (静岡県沼津市)

「名残りの夜空——カナダ人捕虜との交友——」

黒田直隆 (東京都杉並区)

「真っ白な帆に風を孕んで」

南奈乃 (奈良県吉野郡)

「T H E 出産！」

犬伏久美子 (千葉県千葉市)

「隠しごと」

川島英理沙 (東京都豊島区)

「亡き母からの褒美」

桜井俊甫 (大阪府堺市)

「事件」

川畑和嗣 (北海道札幌市)

「千羽鶴」

中山典夫 (兵庫県三田市)

「眩暈の芯」

下村きよ子 (千葉県千葉市)

「ノー マネー」

青柳いすず (茨城県つくばみらい市)

「いのしし考」

大森耀平 (栃木県足利市)

「庭の奥」

吉田はるみ (兵庫県川西市)

「十一文半」

おおつかみずほ (福岡県嘉麻市)

「繭の部屋」

八東一臣 (鳥取県境港市)

「人気者にしよう——冬瓜編——」

田仲浩子 (神奈川県川崎市)

「竜胆の里」

池山弘徳 (宮崎県都城市)

「病に癒された父子の絆」

板東洋三郎 (神奈川県横浜市)

「母の手作り絵本」

天道静子 (静岡県静岡市)

「雛人形」

横山緞子 (東京都町田市)

「魂を捨てた父」

田賀せいし (北海道札幌市)

「春がはじまる」

ナカジマアユミ (東京都世田谷区)

科学記録特別賞

「ロシアに隕石が衝突した日」2013年2月15日03時20分(世界時)

社会批評奨励賞

漆畑辰斗(静岡県駿東郡)

「スズメたちは西へ飛んでいった」

西本美彦(滋賀県大津市)

「ダーチャとベーシックインカム」

歌野 敬(長崎県南松浦郡)

佳作

「喫茶去」

鈴木あぐり(栃木県小山市)

「父の介護」

泉谷久美子(大阪府大阪市)

「桜の季節」

野宮 映(兵庫県西脇市)

「飲ンベー顛末記」

エステル洋子(静岡県御殿場市)

「祇園囃子」

キム・キョンヒ(東京都世田谷区)

「人の一生」

ゴルビー長田(神奈川県横浜)

「祠の記憶」

テンモンア(滋賀県大津市)

「紅無き落ち葉」

ならば たかし(オランダ)

「『塞翁が馬』の背に揺られて」

梶川洋一郎(広島県広島市)

「リストラ忘備録」

鑑照(大阪府大阪市)

「享年九十八」

桐ヶ谷忍(東京都江戸川区)

「鋭い牙はなくなった」

犬丸らん(東京都練馬区)

「たった一人のハイライト」 山県大慈(京都府久世郡)

「わかりあえない」 山根べこりの(栃木県日光市)

「生い立ちの記」 山本真美(京都府京都市)

「『ハセツネ』のこと」 小林理樹(東京都小金井市)

「結婚の資格」 長谷川智美(京都府京都市)

「故郷の山麓で」 藤井典央(福井県福井市)

「ある追憶」 南雲佐和(神奈川県茅ヶ崎市)

「アイデンティティ」 梨香(青森県八戸市)

「ヒヨドリは絵になった」 林 直子(京都府城陽市)

「砂漠の幻想」 六川あきら(神奈川県川崎市)

「変遷」 西村省三(京都府京都市)

「私のヒロシマ」 山崎人功(長野県安曇野市)

「茶色の靴」 伊藤はるみ(千葉県佐倉市)

「光芒」 榎並鞠水(広島県広島市)

「時鳥の歌」 川西葉吉(岐阜県多治見市)

「忘れじ わが海軍の思い出」 郷 芳美(鹿児島県鹿児島市)

「冬枯れの風景」 鈴木功男(静岡県沼津市)

「命さえあれば」 北村昭子(大阪府枚方市)

「摩訶不思議な物体」 金田正太郎(青森県八戸市)

「母の茶がゆ」 池田裕一(大阪府大阪市)

「地域の人々に支えられて」 池田義朗(神奈川県横浜)

「真子という名前」 田中真子(東京都八王子市)

「トムのおじさん」 日沼よしみ(山梨県南アルプス市)

「伯父」 飯島もとも(長野県長野市)

選評



みずぎ りょう

- 1942 北朝鮮生まれ
- 99 小説「祝祭」で第16回織田作之助賞受賞
- 2006 小説「お見合いツアー」で第49回農文学賞受賞
- 07 小説「海老フライ」で第19回労働者文学賞受賞

読ませる勢いのあるエッセイ

水木 亮

私が最終段階の応募作を読んで思うのは、果たしてそれだけその書かれたエッセイが、力を持っているかの評価である。読ませる力のあるエッセイ、プロのエッセイでない以上文章は荒削りなどころがあっても、そういう意気込みの感じられるエッセイを評価する。こう書けば審査員受けがするであろうと巧妙なエッセイもある。しかし、それはこちらにもわかるのである。

エッセイコンクールも来年は一〇年目を迎える。年々、エッセイの内容も充実し応募者の数も増えていて喜ばし

社会批評賞佳作

- 「言葉の力」 きくゐたかを(東京都多摩市)
- 「ソフトな裏技で説く購買力平価説」 黒田隆幸(大阪府豊中市)
- 「自販機に百円玉を」 コミヤマシユン(神奈川県横浜)
- 「『徳』と『得』」 ハイボール・オーマエ(大分県大分市)
- 「見える、言わざる、聞かざる」 赤井ナノカ(長崎県長崎市)
- 「台湾旅行で八田さんに学んだこと」 川瀬 潔(東京都練馬区)
- 「これぞ私の生きる道」 永池あけみ(熊本県人吉市)
- 「小さな捨石」 田桐 勲(愛知県豊田市)
- 「日本語よ よみがえれ」 山内紀美江(東京都墨田区)
- 「街角の唱歌」 斎藤 望(北海道紋別市)
- 「沈黙としての異文化」 小池陽慈(東京都大田区)
- 「ブリキの缶と姑」 福田良子(福岡県北九州市)
- 「ごらん、君の輝く未来を」 堀瀧理恵(東京都府中市)
- 「詐欺のゆくえ」 藤田陽子(神奈川県厚木市)
- 「たたみ半畳の宇宙観」 永平寺座禅修行に参加して」 成瀬 功(東京都目黒区)
- 「命ある限り」 山ノ内京子(大阪府摂津市)
- 「あた桜」 中川一之(京都府京都市)
- 「雑草に教えられて」 井崎多津子(高知県安芸郡)
- 「食いしん坊」 奴賀節子(香川県高松市)
- 「輝き」 塚原 涉(北海道伊達市)
- 「私のアスペルガー症候群と機能不全国家」 田中小百合(福岡県糸島市)

い。特にシニア世代の、今書いておかなければという思いがこめられた作品は心打たれる。

まず、私は鳥生樹郎さんの「『今』を生きる」が最もよく書けていると思った。津波に関するエッセイは昨年も最優秀作品があった。ここでは津波の後の彷徨う住民の姿が生々しい。事実の迫力がある。そのような苦渋の体験をしたから「今を真摯にいきること」「新緑の美しさが本当にいとおい」という心境になるのだろう。貴重な人類の体験を記録としても残していきたい。

「芸芸思潮」の最優秀にふさわしい作品と思う。優秀賞の作品では、サトウユウさんの「あの夜、僕たちは成し遂げた。」は、海に落ちた人を、船員を説得して探す話である。これも事件の展開に興味が引かれる。見間違いではないかという不安のなかで、海中に人を見たという自分を信じる気持ちの揺れがよく描かれている。

沼俊さんの「永久の別れ」は、シルクロードの旅で、ドナウ河の水をすくうのが夢であるという亡くなった自転車仲間の言葉を実現する。灰色の塊がドナウ河に消えていく。忘れられない友情の風景がそこにはある。

岡野みつるさんの「チャッピー」は事故に遭った猫のチャッピーの話である。ここまで猫を大切に、尽くす姿に恐れ入った。松川琴美さんの「虐待」はすさまじい実の両親から受けた自分の虐待を書いた。これが虐待の警鐘になることを願う。

奨励賞の作品では、北美舜さんの「亡き母からの褒美」は無学だった母親の上の学校に行かせたいという思いを、定年になってから息子が実現する話である。六三歳で大学生となり、体育実習では若い大学生とエアロビクスを、恥ずかしくなる思いで学習し卒業を迎える。その挑戦する勇氣は母親からの褒美でもある。シニア世代によい意味で刺激となるエッセイとみた。文章も手書きだが読みやすく、味わいがある。

南奈乃さんの「真つ白な帆に風を孕んで」は船員を養成する大学で学ぶ自分の娘のことを書いた。その厳しい実習の様子が興味を引く。またそれに耐えて頑張る娘への母親の思いがよく描かれている。

寒川靖子さんの「紫蘇染めの晒し木綿」は、自分の家に仮宿した兵隊に、別れの時木綿に梅酢に浸して乾かしたものをプレゼントした。喉の渴きを防ぐためである。短い戦地に赴く兵隊さんへの思いがあふれていてよい。

青柳いすずさんの「ノー マネー」は飛行機で一緒になった不幸なチ

入選

- 「思春期自己破壊型」 鈴木里奈
- 「私のオーストラリア」 ウスイアスミ
- 「川堤を走る」 きひつかみ
- 「怒気」 くりた
- 「ヘレンの『ぶー』」 せんとう あい
- 「やさしい娘」 マーさん
- 「五時点灯」 よすみこうすけ
- 「故郷」 伊澤古都里
- 「私の不思議なヒーロー」 羽田スウ
- 「ハーレー・ダビットソン」 吉田宏子
- 「大阪遠征」 九条之子
- 「過疎化の故郷から、声が聞こえる……」 佐藤義弘
- 「民家移築の思い出」 柴田大五郎
- 「妄想の人生」 秋山思源
- 「アラブ、ぶらぶら」 秋村耕野
- 「コブ談義」 十七団
- 「ウィッグ」 小野友貴枝

- 「いよいよきたか、いやいやまだ」 上村和子
- 「ボール怖い」 青井啄蔵
- 「寿司屋と私」 雪路
- 「ホームグラウンド」 泉 まり
- 「プレゼント」 船山千恵
- 「花が綺麗に見えた」 大桐信之助
- 「水仙と文さん」 谷川 奏
- 「深爪まで2、3ミリ」 朝生カイ
- 「ある運転手との出会いから」 渡辺寿美子
- 「思春期から青春と死へ」 島本青玄
- 「変身願望」 日向佐保
- 「奇跡の花咲く」 八坂明日
- 「ここに毒をかかえて」 碧海月子
- 「『無宗教』のホトケ様」 辺見 悠
- 「記憶のいたずら」 木村令胡
- 「ドミノ骨折」 木立慈雨
- 「ペットボトルの水」 六藍光洋
- 「ガマやーい」 島田和武
- 「ばあさんのとこ屋さん」 山本信之
- 「二〇二・三・一 仙台」 酒井恵三
- 「最後の言葉」 寺岡寿子
- 「フラナという名の鳥」 西野久美
- 「飽食の裏側」 黒岡 實
- 「運命のいたずら」 齋賀由美子
- 「幸せはどのくらい？」 苑田有子
- 「少女A」 山崎文男
- 「晴れのち曇り……駅にて」 村田直美

- 「逃げるが勝ち」 秋元宣壽
- 「父に詫びる」 小川クニ
- 「秀吉が博多で食べた菓子」 清田進
- 「紙芝居の箱」 菅谷春子
- 「その色の記憶」 井上幸子
- 「畦みち」 渡辺庸子
- 「義姉の親切故に」 中田澄江
- 「ひとり娘の報復」 吉岡順子
- 「夫の入院」 菅宮慶江
- 「リバーシブルな紅白帽子と白いトラン」 新井洋一
- 「『場の力』と『わくわく』のチャレンジ」 森喜代美
- 「言葉は人を自由にする」 藤川哲史
- 「昭和の新聞社として支局記者」 香月よう子
- 「世の中が目まぐるしく変わっても」 山世孝幸
- 「五十年目の詫び」 渡邊和加子
- 「パンプキン・パンプキン」 野々下留美
- 「母と土曜日のきつねうどん」 倉田紗緒里
- 「うちのカメちゃん」 高橋正記
- 「Sさんのこと」 中村行寿

社会批評賞入選

- 「私が大衆映画に味方する理由」 御室孝
- 「愚痴の追伸」 沙山和子
- 「鬼火」 新庄 敏
- 「常識という名の幻想」 小林大祐
- 「カミナリオヤじ」 森 幸夫
- 「真実の扉」 井 由美子

りの女性におかねをあげた。飛行機の乗り換えで、必死に窓から手を振る彼女の姿が一期一会で心に残る。
田賀せいしさんの「魂を捨てた父」は、台湾で警察官をしていた父親が敗戦で追われる身となった。父親がマークしていた人物に逆に助けられて帰国できた。それからの父親の変容が書かれている。そこにも愚かな戦争の傷跡が残る。

田仲浩子さんの「人気者にしよう／冬瓜編」は冬瓜に関する楽しい話である。手書き原稿だが読みやすく、丁寧な文字から書き手の人柄が忍ばれる。それも大切なことである。

大森耀平さんの「いのしし考」は畑を荒らす猪の話だ。捕らえた猪に鉄砲を向けると涙をこぼすのが堪らないという。こちらも読んでいて堪らない。

外山寛子さんの「砂の墓穴」は朝鮮からの引き揚げに関わる忘れられない光景を書いた。貴重な記録である。

高橋惟文さんの「バードテールの砂」は震災は小動物の世界にも影響を与え、小鳥に寄せる愛情が胸を打つ。

そのほか印象に残ったのは、中川一之さんの「あだ桜」は読んでほろりとする。

川島英理沙さんの「隠しごと」はアダルトの女優になった友人について書いた。文章力を感じる。

上杉辰さんの「改心」は正直に、飾らず自分の経験を書

ら堪え、そこに根を生やして乗り越えようとするのも、また本質的な生きる姿だろう。二つの火花が散る所に、生の充実があり、生きる心が形成され、花や果実がもたらされる。この世界の真実の相を見せてくれる文章作品が今年も豊かに集まった。よい作品、優れた作品が昨年よりいっそう多く集まり、激戦で、優秀賞に値する作品はここに決まったより実質的にもっと多数あった。奨励賞レベルも鈴生^{すずな}りで、例年の二倍以上はあったものの、涙を飲んでもらった。たわわな実りを感じる第九回のエッセイ賞だった。運命との火花、その格闘を誠実な言葉に託して多くのひとの共感の領域に結晶させようとする作品を私は最も評価する。そういう作品には、言葉に込められたエネルギーがある。思いの強さ、思いの深さと言っているいかもしれない。祈りが託されたものにもなる。それは必ず言葉の強さとして現れてくる。今回最もその言葉の強さを感じたものは、鈴木綾子氏の「私の『チゴイネルワイゼン』」だった。白血病になった息子の闘病とコンピュータ・グラフィックの表現による生き方を軸にした作品だが、むしろ言い足りない文章表現のうちに、生きる意味を積極的に模索する格闘の苦しみが伝わってくる。きれいな言葉や華やかさだけが点綴されているようだが、その間に潜む呼吸に足掻きや葛藤が隠されている。最優秀賞として第一に推した作品だった。

いている。自分は女連れの遊びで出かけたが、貧しい村でけなげに働く少年を見つめる目がよい。また印南房吉さんの「杖、光る」は今年も健在で嬉しい。
読み手に思いが伝わる力のあるエッセイ。一〇年目を迎える来年にまた期待したい。



いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ
79 「流謫の島」で群像小説賞受賞
新人長編小説賞受賞
98 「緑の手紙」で読売
新聞・NTTプリンテック
主催第1回インターネット
文芸新人賞最優秀賞受賞
2002 「鉄の光」で健友館
文学賞受賞

百花繚乱の充実

五十嵐 勉

今年応募総数五二一篇と五〇〇の大会を超えた。内容も実に多岐にわたり、様々な人生とその体験を記し示してくれた。

人はそれぞれの多様な運命を生きている。その苛酷さ、激烈さに遭遇し、翻弄されるのも人生なら、それにひたす

もう一つの最優秀賞、島生樹郎氏の「『今』を生きる」も、津波に襲われる現場の体験を生々しく伝えて、迫力がある。津波の襲ってくる様子、その力、それから逃れようとする力が自然の猛威との闘いのうちに実にリアルに伝わってくる。津波の体験記録として貴重なものだが、浪江町というと福島原発のすぐ北である。福島原発を襲った津波の勢力が具体的にわかるとともに、その被害の甚大さも窺わせる。しかし作品では福島原発に触れていない。その後の原発との関連も書いてほしかったと思つて編集者として連絡を取ったところ、実は作品は全体の数分の一で、このあともつといるいろいろなことが続き、原発の問題もさらにとから出てくるということが続いた。もしそれがつぶさに記されるなら、きわめて重要な記録になる。今後さらに続編を書いていただくということで、思わぬ方向に発展した。期待したい。タイトルがやや抽象的でも足りないのも、これで納得した。この作品は氷山の一角である。

記録性として重要なドキュメンタリー・エッセイがもう一つあり、東海汽船の船上から遭難者を発見し、勇気をもって救助する話「あの夜、僕たちは成し遂げた。」（サトウユウ）も論議的になった。海上で救助することの困難とそれに立ち向かう勇気を示してくれた点で、出色の作品となっている。最も選考委員の票を集めたが、特に印象に残るのは、船員の言葉である。「あなたお酒飲んで

しょ」「これが狂言だったらたいへんなことになるよ」「嘘だということがわかったら、二千万円くらいの損害賠償になるけど、それでもいいんだね」と言われたら、だれでもひるんでしまうだろう。そこを突き抜けて主張した態度に勇気がまぶしく光るが、もう一つここで立ち上がってくるのは、損害賠償の問題である。こういう場合、人名救助を優先して保険制度を作っておくとか、この壁をもっと容易に乗り越える仕組みを社会制度として構築しておく必要を感じた。発見者がこの筆者のように勇気のある人とは限らず、ひるんでしまう人もいるはずだからだ。その意味では、社会批評性も強く含んでいる作品である。

最優秀賞に近い評価をしたのは、山田まさ子氏の「救急車は呼ばないで」である。精神病院に二度も強制入院させられた母親の惨酷な体験からの恐怖を、命を失うまでの心理の壁として描ききった筆力は、明らかにこれまでの二作を数段超えた凝結を示している。ここには運命の狭間で裂かれる人間の傷みがある。これを書いたことで、山田氏も何かを昇華しえたと推察する。拍手を送りたい。

「虐待」（松川琴美）も選考委員の注目を集めた。文字通りの父親からの虐待で、このような酷い仕打ちが存在するのかというほどの酷さだが、これを持ち越えて、被害者の体験を普遍的な訴えとする姿勢に、光が射している。表にはあまり出てこないが、よく目を凝らしてみればこのよう

な被害に遭っている人たちは少なくないだろう。それに目を向けさせてくれた作品として意義が深い。

西島雅博氏の「きつと、帰ってくつと」は、海で生きる人々の自然との闘いを愛する家族の情に重ねて、胸に深く染みる秀作になっている。西島氏も技量を上げている。読後、海の青さが水平線の母性となって彼方へ広がる美しさがある。

「心を守るために」（浅井真理子）は、近年多い、現代の都市生活の中で起こる内部の問題を、重い体験をとおして誠実に描いた好篇で、内部が壊れる傷みを、素直に前向きに捉えてやさしくむしろ前進を見せているところに開いた読後感が残る。ひたむきな人ほど現代社会の機能優先の軋轢の中でいつのまにか壊れている部分に気がつかされるケースは少なくないはずである。この作品はそういうたくさんの声を集めている気もした。

「空白の通知表」（城戸則人）は、戦争末期の広島県の呉の空襲とそれに続く広島市の原爆の体験を、通知表というめずらしい角度から綴った異色の作品である。視点の特異性が、最後の原爆のシーンとうまく重なって戦争のすさまじい一面を表出した。

今回戦争体験の記録が他にもいくつかあつて、それぞれ深いものが宿っており、優秀賞に推したものの、不運にしか届かなかつたものもある。外山寛子氏の「砂の墓穴」は、より鮮やかにわかる好エッセイで、さらに腕を上げた結実感があつたが、夫となる二番目の恋人の人物像がもっと生き生きと動けば、インドの大地が大きく立ち上がってきただろう。

「ももこの世界」（栗山恵久子）も私としては優秀賞としかつた作品である。発達障害の娘との母子ともどもの成長を深い眼で捉えて、そこに積極的な光を見い出す筆者の態度には崇高なものがある。眼差しに、高められていく昇華感がある。けっして繰り返しではない深まりと前進を賞揚したい。

優秀賞と奨励賞の境目も微妙だったが、奨励賞と佳作の境界線引きも困難を極めた。どれもおもしろく、興味深く深く感じさせられるもの、魅力あるものがたくさんあつたからだ。例年よりも当然受賞者が多くなつたが、それでも足りなかつた。率直に言えば佳作以下はかなりの作品に泣いてもらつた。しかしできるだけ多くの胸に残つた作品を「文芸思潮」に掲載して読者に読んでもらいたいと思つている。

奨励賞でも問題作品や印象深い作品、秀作はたくさんあり、挙げきれないほどである。連続九回受賞の印南房吉氏の「杖、光る」は一貫した氏の障害をむしろバネにして積極的に踏み出す姿勢が結実して輝きを放つている。「譚妄」（白楊風子）も死を前に人生全体を振り返る苦悩が悲

定番となつた「動物もの」は今年もいい作品が出た。「チャッピー」（岡野みつる）の、交通事故に遭つた猫を大事に育てる深い愛情は、筆者夫婦のやさしさにさらに明るい色を添えて心をあたためてくれる。

海外生活を素材にした作品は、今年は優秀賞が出なかつたのが残念だが、惜しかったのは「紅無き落ち葉」（ならは たかし）と「インド移住まで―天の配剤―」（李耶シャンカール）である。ならば氏の作品は移住したデンマークでの愛嬢の死を描いて痛切に響いてくるものがあったが、後半裁判になつて社会問題に摩り替えられていくのが難となつた。李耶氏の作品は海外に住み着くその経緯が

定番となつた「動物もの」は今年もいい作品が出た。

「チャッピー」（岡野みつる）の、交通事故に遭つた猫を大事に育てる深い愛情は、筆者夫婦のやさしさにさらに明るい色を添えて心をあたためてくれる。

海外生活を素材にした作品は、今年は優秀賞が出なかつたのが残念だが、惜しかったのは「紅無き落ち葉」（ならは たかし）と「インド移住まで―天の配剤―」（李耶

シャンカール）である。ならば氏の作品は移住したデンマークでの愛嬢の死を描いて痛切に響いてくるものがあったが、後半裁判になつて社会問題に摩り替えられていくのが難となつた。李耶氏の作品は海外に住み着くその経緯が

劇的業苦として浮かび上がってきて注目された。「白い傷痕」（宇佐美宏子）は、若き日の愛の苦悩を刻印深く描き出して、情熱と苦しみの鮮烈な青春を結晶させている。川畑和嗣氏の「事件」は、教会の信者と聖職者の狭間を厳しく剔出して短編小説としても成立しそうな鋭さを突き付けている。「隠しごと」（川島英理沙）は問題作。アダルトに出た友人の姿を追って孤独と性愛の亀裂を提出している。「THE 出産！」（犬伏久美子）も、出産の苦しみをズバリ描いて、ありそうでない率直でリアルな記録には瞠目した。「改心」（上杉辰）のフィリピンの自然の中で働く素朴な少年家族のみずみずしい生き方に心を揺さぶられる話は、すがすがしい。

社会批評賞は、今回突出した作品がなく、奨励賞が二作だった。旧ベルリンの壁を扱った「スズメたちは西へ飛んでいった」（西本美彦）と、「ダーチャとベーシックインカム」（歌野敬）である。ベルリンの壁という東西の政治体制の犠牲になった青春群像を現場の生活体験に基づいて描いた世界は鮮やかな色を残した。歌野氏は自らの自給率九〇％という実生活から構築した経済理論を基に新しい可能性を説いて斬新である。これがあるならという安心も得られたし、また原子力のような対極にあるものの危険性も逆に照射している気がした。「台湾旅行で八田さんに学んだこと」（川瀬潔）も意義のある報告で、先達の遺産

応募作の一篇、一篇は、作者がこれまでどのような本を読み、親しんできたかを打ち明けるものであり、また、作品が感動をもたらすものだとするならば、作者の意図する感動とはどういうものであるかを告白するものである。

当選作の島生樹郎「『今』を生きる」は、大震災から二年を過ぎた「今」から、あの日を振り返り、「息が止まった」という巨大津波の脅威を報告していく。その「今」とは、亡くなった人の多さと、いまだ遺体が発見されていないことを憂う「今」である。作品は「逃げ切れないと思っただ」という大津波の体験を描いていくのだが、どんな過酷な状況にあっても、人間であり続けることの意志と態度に眼が向けられていて、丹念だ。

たとえば、「おばあさん達を引き連れて」逃げていき、「野宿」をするほかになく、「燃やすものがないか周囲を探し回」ることになるのだが、やっと「たき火」に手をかざすことができたとき、「おばあさん」の一人が「筆筒にしまっていた五十万が流された」と洩らす。するとすかさず、もう一人が「私はもつと多かった」と言い張り、また別の「おばあさん」は、「高い着物を何十着も流されてしまった」と、無念とも、自慢ともつかぬことを言い立ててから「位牌を持ち出せなかった」と先祖に詫がる。

ここには、粉雪の舞う野宿のときでさえも、寒さと飢えにもまして、「おばあさん」達の「たき火」に差し出す手に、

を尊ばなければならぬ思いを強くしてくれるものだったし、「『徳』と『得』」（ハイボール・オーマエ）も現代に欠けているものを明らかにしてくれた。

科学記録として重要な作品が今年も寄せられ、漆畑農斗氏の「ロシアに隕石が衝突した日」は、天体の大きな視野から地球の現在を照射して新鮮な角度から現在を浮かび上がらせてくれた。特別賞として賞したい。

様々に啓発され、様々に体験させられた、まさに百花繚乱の今回のエッセイ賞だった。充実を実感している。来年はいよいよ第一〇回、千花繚乱を期待したい。



みかみ ひろし

作家
1945 山梨県甲府市生まれ
法政大学中退
1982 「三日芝居」で
すばる文学賞受賞
著書 「三日芝居」
「花供養」
「月と五人の男」

野宿での自慢話

三神 弘

言葉に、生きることのいわば啓示というものを感じ取っていく作者がいる。そして「あれから二年が過ぎ」、「大切なのは今を真摯に生きることだ」という境地にいたる。大震災という体験を、歳月を重ねながらも、そしておそらくこれからも、個人の経験として深めていこうというところに、感動の質がある。題名も、率直だ。

当選作の鈴木綾子「私の『チゴインエルワイゼン』」は、「桜の花びら」が舞う季節に「急性白血病」と診断された息子と母との日々で、息子が個展を開催するのに奔走することや、息子を亡くし、「悔しさと悲しみ」で「胸がえぐられる」と訴えかけ、また、「芸術に国境がない」とも「味わい深い人生とは、人のために尽くせる喜び」だとの感慨もある。

実体験であるのかはともかく、作品の現実性は、言葉で表わしていくほかになく、そのことというならば、この作品は書割りであり、感動の筋立て、仕組みづくりという印象を否めない。翻つていうならば、これらは、いわゆる誰が読んでも一定の評価を得られる作品の条件ではあるが、誰が読んでもというのは、文学ではあまり意味をなさない。見えないものを見ていく試みを、期待したい。

優秀賞についてふれたい。沼俊「永久の別れ」は、「ドナウ河の水をこの手で掬うのが、俺のシルクロードの旅の夢なんだ」というのが口癖だったものの、病いで他界して

しまった自転車仲間への、鎮魂である。そして「私」と「仲間」は、その夢を果たすために、ドナウ河を目指す計画を立て、自転車をこぎ出す。

ドナウ河では、遺影を隣に置いて腰を下ろし「ほんとなら、今頃は君と乾杯していたはずなのに」と語りかける。そして遺骨の「灰色の塊を押し頂いて」「ドナウの水に浸した」という。ここには、歳をとることを恐れなくなった人間の果敢さとともに、失ってはならないもの、求めていかなければならないものが暗示されている。

浅井真理子「心を守るために」は、よりよく生きようとするのが病いをもたらすという理不尽さをとおして、今日のテーマを提出している。端正な文章で、これは訴えごとではなく、自己検証によって得たものであり、「心の静けさ」というものは、訪れたときに初めて、自分の心が静かでないことを認識できる」は、みずみずしい。書くという営みは、健全な精神の働きによるものだという事も伝えている。

山田まさ子「救急車は呼ばないで」は、母のころのなかにあるものを自分のころのなかに捜していくのだが、母への愛情にふさわしく、なかなか辿り着けず、悔恨になっていく。作者の作品を読むのは三作目だが、表現に不足がなく、人物の関係が明らかになり、読み応えは増していく。それは、評価された過去の自作に習わず、真似な

いからだ。

城戸則人「空白の通知表」は、小学校時代の通知表を偶然見つけ、評価欄の「防空事情ノタメ査定不能」の文字から、戦争の日々を思い出していく。行替えが多く、そのため細部が描き切れていないが、しかしそのことが、不足を読者に補わさせていくという効果をもたらし、記憶をたぐるといふ題材に見合っていくから、表現というのは不思議なものだ。

サトウユウ「あの夜、僕たちは成し遂げた。」は、ごく普通の青年が、予期せぬ出来事から英雄になる物語でしたが、このころの動かし方も、行動も身近にすることができ、愉快であり、批評もあり、題名も気が利いている。西島雅博「きつと、帰ってくつと」には、何よりも土地の感覚というものがある。松川琴美「虐待」は、時代の用語である意味を超えて、深刻さと、一途な訴えとで貫かれている。岡野みつる「チャッピー」は、たんに猫への愛情や思いの丈を語るのではなく、観察が表現に反映している。夫婦の姿も見えてくる。

受賞にはならなかったが、強く推薦した作品に横山緞子「雛人形」がある。父母の手で、やがては娘たちの手で毎年飾られてきたという雛人形をめぐる記憶で、時代を経て人が逝き、なお、今年も春を呼ぶ雛人形への感慨を描いている。雛人形に人生を重ねていく手法に着目したい。



つづき たかひろ

1978 山梨県生まれ
東海大学文学部卒
2002「看板屋の恋」で第
91回文学界新人賞受賞
「狼を見る」(文芸思潮)
「ハネムーンきどり」(三
田文学)他 月刊「望星」
書評員
現在 TV のナビ番組など
の構成作家としても活動中

満漢全席、ご堪能あれ

都築隆広

沼津に深海魚釣りに行って、転んで右腕の骨にヒビが入りました。「腕、どうしたの?」「いや、深海魚を……」「腕、どうしたの?」「いや、深海魚を……」と、選考委員の先生方と顔を合わせるたびに「沼津」と「深海魚」を連呼しなければならず、顔から火が出る思いの選考会でありました。なお、利き腕が使えないため、この選評は音声認識入力ソフトによる完全口述筆記で書かれています。最先端技術バンザイ。

さて、今回の上位は「『今』を生きる」「私の『チゴイネルワイゼン』」「あの夜、僕たちは成し遂げた。」の三つ巴でした。「『今』を生きる」は震災モノですが、むしろその技術の高さが評価され、「チゴイネルワイゼン」

は高い技術ではありましたが、それよりも真摯な内容が評価されました。「あの夜、僕たちは成し遂げた。」は漂流者救出という衝撃的な内容でした。しかし、発見者の方が疑われ、圧力を受けてしまう社会システムや、ここに描かれている船員の性格の悪さなどのドラマ性の方が、話題にのびりました。

この三作の中では、私は「あの夜僕たちは成し遂げた。」が面白かったです。「『今』を生きる」はかなり読ませるものの、応募者の中で「震災体験記を書けば入賞できる」みたいな風潮になっても困ります。「チゴイネルワイゼン」は白血病の息子の闘病についての話は良かったものの、遺作展が盛況であることや、作者が講演会をしている等の情報が、悲劇性を薄れさせてしまっていると思えました。「作者が本題以外で書きたい部分」が透けて見えてしまった点は残念でした。

ところで、当選作二作の論争の果てに、「あの夜、僕たちは成し遂げた。」がなんとなく存在感が薄まり、優秀賞に落ちてしまったことはまことに遺憾であります。選考はナモノですから、斯様な事情で、「当選作に限りなく近い優秀賞」が生まれることが稀にあります。

同じく優秀賞では毎年恒例、ダメ人間エッセイ界のイチローとも呼ばれる(たった今、命名)、山田さんの「救急車は呼ばないで」。虐待系のエッセイのなかでも、最も極

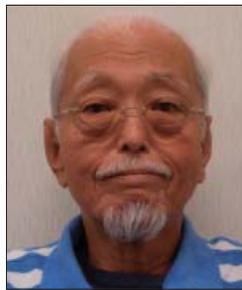
悪な肉親像が描かれていた、その名も「虐待」。選考委員からの平均的支持があった、常連投稿者、西島さんによる「きつと、帰ってくつと」などの作品が高得点で、論議の的になりました。

特に「救急車は呼ばないで」は過去の山田氏の作品よりもクオリティが高く、「精神疾患で生まれる狂気を、どこまでエッセイとして評価していいのか」という点で、議論が分かれなければ当選作になっていたかもしれません。それにしても、いい意味でひどいタイトルです。

「虐待」も「これといった原因もなく、このような暴虐に走る人間が本当にいるのだろうか？」という議論が起こりましたが、私は逆に、因果関係もなく生まれる悪意の方が現代的で、生々しい恐怖のように感じられました。

さらに優秀賞「チャッピー」は選考委員の先生方の大好きな動物感動ものとあって、若手を代表して上位入賞を阻止せねば……と思ったのですが、やはり熱烈な支持があり、優秀賞になりました。タイトルの時点で、すでにたまらないうと、愛猫家でもある水木亮選考委員が熱く語っていました。涙もろくなるのにも程があります。

続いて、奨励賞。「魂を捨てた父」や「雛人形」は、実は優秀賞の「あの夜、僕たちは成し遂げた。」と同等かそれ以上に私は支持していたのですが、これまた他の選考委員の票が集まらず、このぐらいの位置になりました。



ふくおか てつし

1948 山梨県甲府市生まれ
樋口一葉研究会員
都留文科大学非常勤講師
著書「評伝深沢七郎ラブリソディ」(TBSブリタニカ第3回開高健賞奨励賞)「遠い散歩近い旅・山梨文学散歩」(山梨ふさと文庫)ほか
「猫町文庫」編集発行人

「私」の客観視

福岡哲司

人々の見聞・体験はこれほど多様なものかと驚かされるのが常である。今年も多岐に渉るモチーフの文章たちに触れることが出来た。と同時に、「私」をも客観視できるか否かが、エッセイの課題になることも痛感した。

六八年前にゼロどころか大きなマイナスで迎えた「敗戦」。訝しく感じる現代の空気にかかわっているかどうか、戦争の時代をモチーフにする文章は多かった。

城戸則人「空白の通知表」。呉が連合軍による激しい空爆に曝されたことは知っていた。が、筆者の記す昭和二十年の爆撃の甚だしさは「知識」を越えた。地上を逃げまどっていた「私」は国民学校一年生。粗末な初めての通知表に記されていたのは「防空事情ノタメ査定不能」という

なかでも、「魂を捨てた父」は戦時下の台湾で、最も父親が疑いをかけていた現地民に匿われる警察官一家の物語で、とてもスリリングでした。個人的にはイチオシだったので、**「魂を捨てた」という題名は、ちよつと、やりすぎなようにも感じられます。捨てたのは「魂」ではなく、「魂」という概念に置き換えられてしまった感がありました。**「雛人形」は支持者も多かったのですが、戦中の記述に不明瞭な点があったことで、やはり奨励賞になりました。面白過ぎて公共性を逸していたり、終わってみると他作品に上位を譲ってしまった秀作が、今回は多かったです。作者と選考委員にとっては苦難の選考だったものの、そのおかげで、読みごたえのある作品が出揃いました。

猿の脳味噌や駱駝の瘤とは参りませんが、古今東西の珍譚奇譚、人情斬。「文芸思潮」流、作品の大御馳走「満漢全席」、とくにご堪能あれ。

※満漢全席 満州族と漢族の珍味を集めた中国の宮廷料理。二十四時間では食べきれないとも言われる。

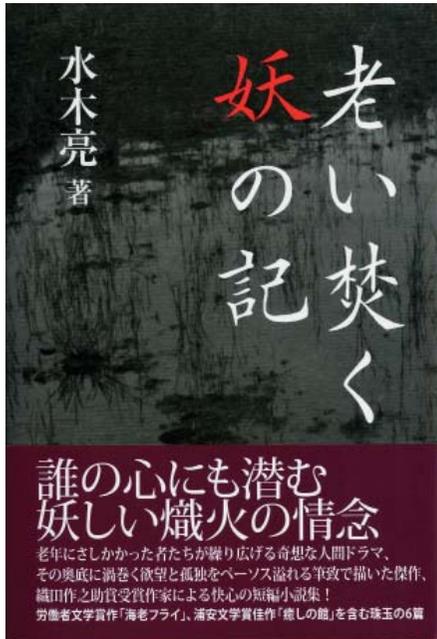
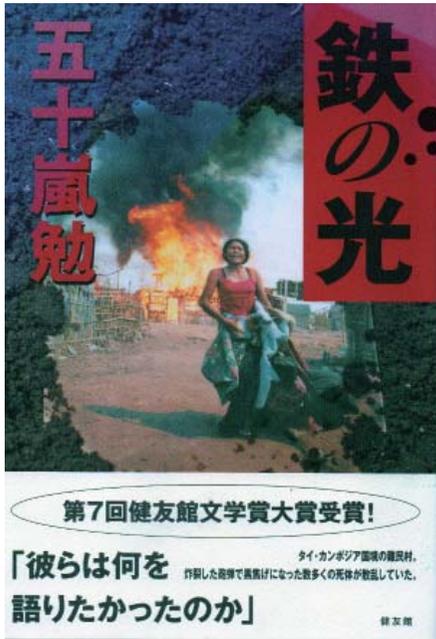
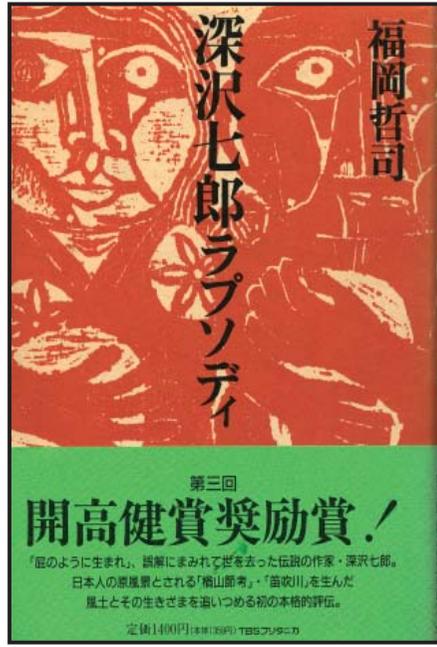
文字だった。字を読むことの苦手な母が、そうとは知らず丁寧に保管していたものだ。母への思い、時代の不条理さ……幾重にも思いの残る文章である。構成をさらに整理されたら印象もさらに鮮明になるだろうと惜しまれる。

外山寛子「砂の墓穴」は、敗戦後収監された北朝鮮の収容所での体験である。シベリアへ移送される途中逃げだして来たミイラの如く衰弱した日本兵。筆者ら同胞を目にするや意識を喪失^{うしな}ってしまう。そして、死。大人二人子ども三人で砂丘を手指で掘り屍を埋葬する。筆者が長い間かかえこんできて、整理できていないものだ。体験が凄まじいだけに「兵隊さん」「王子様」「メルヘン・チック」などの用語が不用意である。

黒田直隆「名残の夜空―カナダ人捕虜との交友」
捕虜のわだかまりの深さ。戦時、民間企業が捕虜の強制労働を請け負い、戦後の処理にも当たったことについての貴重な証言である。被害者意識の強いカナダ人と対応に苦慮する「私」という類型が標題の「交友」の語と共に気になる。

鈴木綾子「私の『チゴイネルワイゼン』」
難病の我が子に対して無力感を抱く親。その果てに鎮魂の思いはこういう表現をとるのだろう。標題にもかかわらず終末部の手慣れたまとめ方が気になる。

武藤蓑子「李の花」の繊細かつ熱情ある表現が魅力的で



選考会風景

印象に残った。筆者の望郷と母への想いの表れだろう。抒情的な表現は母の姿態の哀しさを余計に際立たせる。メンタル・ヘルスが今や企業・組織（学校を含む）の重大なテーマであるにもかかわらず、それが正面から見つめられることは相変わらず少ない。当人独り己だけに向かい合い無限に靴下を裏返し続けている。「心を守るために」世界に裏切られてゆく。もはや「休職」だけでは済まぬ事態を提起している。

西嶋雅博「きっと、帰ってくつと」はモチーフの選び方が小説的である。それだけに、エッセイとしては、書き手とモチーフとの間に隙間を覚えるのも事実だ。だから、郷愁の念が余韻として残るものの、漁村生活の昔に変わらぬ苛烈さの印象は薄められてしまっている。

サトウユウ「あの夜、僕たちは成し遂げた。」は特異な体験が読ませる。ただ、年配の船員が「悪」として典型的に描かれていることが物足りない。

岡野みつる「チャッピー」

高齢化を速めるのはなにも人間の世の中ばかりでなく、ペット界も同様である。いずれがいずれをみとめるのか、人とペットとが共生し、共老して行くのである。筆者の飼った猫への愛惜が浸透している。